

会報

一〇月例会

一〇月四日(土)午後一時より

於 陳列館 第二教室

アメリカにおける日本史の研究

小葉田 淳

私の招聘された東西文化センターのことからお話ししよう。東西文化センターは、アジア・太平洋地域およびアメリカ合衆国の人々の相互の理解を深めるという目的をもって、一九六〇年に合衆国会によりハワイ大学内に設置された。その運営経費は毎年合衆国会庫より支出される。現在実施されているセンターの主なるプログラムは、学生部 Student Program、国際技術交換部 Institute for Technical Interchange および高等研究部 Institute of Advanced Projects の三部門に分けられる。このうち高等研究部では、アジア・太平洋地域における文化・社会・自然の諸科学にわたって、東西の学者を集めて討議し研究することが重要な仕事になってい

る。私の滞在した一九六三年度には、日本・

中国・インド・インドネシア等および米本

土・イギリス等より招聘された二十数人の学

者が、この仕事に従事していた。私の場合

は、琉球史研究のグループの一人として招聘

されたわけであるが、ひろい意味において日

本史或いは日本文化の研究は、将来とも高等

研究部における重要なテーマの一としてとり

上げられるであろう。また、この部では、アジ

ア・太平洋地域に関する問題について国際的

会議を主催し或いは後援することが一の事業

となっている。一九六一年の第十回太平洋学

術会議もその一例である。この部に属して調

査翻訳局があり、東西の学術書の翻訳を目的

とするが、私の滞在中に開催された日本の学

術書翻訳についての会議、これには日本より

四人、米本土より数人の日本語関係者が集ま

ったが、これもこの局の事業であった。な

お、高等研究部には出版局が設置されてお

り、部で行われる学術調査研究の結果を印刷

普及することに務めているが、そのみでな

くひろく学術書の普及にも貢献しようとして

いる。最近、東西文化センター・プレスとして

出版された姉崎博士の「日本人の宗教生活」等

はその例であろう。次に全くべつ見程度であるが、私が見聞した米本土の大学・図書館の二、三について述べよう。まず、ニュー・ヨークのコロンビア大学であるが、この大学では東アジアについての講義は、一九〇二年英国ケンブリッジ大学の H. A. Giles 教授による中国研究の講義より始まったという。一九二九年に日本より文献が寄贈されて角田龍作博士がこれを管理し、また同博士の日本宗教史、同思想史の講義が開かれた。一九三四年 George Sanson 教授が日本文化史を開講し、同教授は戦後、東アジア研究所 The East Asian Inst. が設置されるとその初代所長となった。コロンビア大学では東アジアに関する、教授・研究および出版等は、三の部門において実施されており、日本史に関するものも、ほぼこの中に含まれる。その一は哲学部のシナ語・日本語学科において、言語・史学および人文科学の課程があり、修士および博士の課程がある。その二は東アジア研究所で、こゝでは現代の東アジアについて、大学院学生に対する指導および研究がなされ、政治・経済等の他学部との共通のプログラムとして行なわれる。その

三は東洋研究委員会 The University Committee on Oriental Studies 及び 東アジア

に関する学部課程の指導をしている。一九六三年は東アジア研究が開始されて六十年に当たったので、これを記念して、右の三部門および東アジア文庫がケント・ホールへ移転した。同文庫のうち日本関係の資料は、角田博士の努力と管理の下に現在約五五〇〇冊を数えるという。最近のコロンビア大学出版を見るに、Healn Croig McCullough 氏の太平記の翻訳のほかに、篠田実博士の鎌倉幕府の成立があって吾妻鏡の翻訳を収めている。

また、Introduction to Oriental Civilization 三冊は、日本・シナ・インドの思想・道徳・宗教史に関する史料を英訳しこれを基に研究しているが、日本の部は角田博士はらと Wm. Theodore de Bary, Donald Keene 両教授が担当している。Keene 教授等が代表しているように日本の文学作品の翻訳は盛んであるが、同時に日本の過去の儒者・僧侶その他の著名な書や史料等が翻訳されるのが、近時の一傾向で、角田博士等のこの書はこれを集約的に象徴している。

ユール大学では東洋の文献を一文庫とせ

ず、欧米の書とともに部類分けに整理されている。中央図書館に架蔵の日本書は約三万冊とい

う。ここでは故朝河教授の日本史の教授および研究の業績がきわだっている。教授の蒐集した文献の一部は別置されているが、京都古文書と題した文書写本十三冊、京都八組寄会文書などその中に含まれる。このような古文書の原本乃至写本は、アメリカにおいても他の大学、図書館にも殆ど見出すことは出来ない。また、教授の遺稿やメモの類は現在整理されつゝある。John Hall 教授など近時ユール大学へ移られているが、朝河教授の莊園及び封建制度史研究は、何としても欧米においては卓越したものであり、その伝統をうけてユールにおける日本史研究の将来を期待したい。

ハーバート大学における日本史研究の拠点 は、やはり Harvard Yenching Inst. において、ここには漢籍二五万に對し、日本書は七万あるという。しかし、この研究所の中心はやはり中国にあって、なお日本学の劣勢は覆われなう。別に The East Asian Research

Center が設けられて、John K. Fairbank 教授が所長である。ここでの研究分野も中国

共産党等の現代中国が主な対象となっており、日本研究はその一分派乃至補助的立場に過ぎない観がある。

近時、アメリカでは、日本への関心が高まり、文献の集積に努めている大学が多いが、文献の豊富なことでは国会図書館に及ぶところはない。国会図書館には一般閲覧室二室のほかに、特別閲覧室が十五ほどあり、その一に東洋部の室がある。この室には、中国、日本、ヘブライ、中東・南・東南アジアの文庫が所屬している。日本の文献は八六万点にも達するという。未整理の部分が多いが、古記録・古文書その他、私どもが善本と普通にいふ類は全く存しないといつてよい。この点は同図書館所蔵の漢籍とは面目を大いに異にする。この相違はアメリカの諸大学・図書館に共通していえることであらう。アメリカでは中国研究が先きに興り現在もなお東アジア研究の中心の地位を占めるところが多く、文献の蒐集時期も日本のものとは概して一世代の差がある。

しかし、第二次世界大戦時およびその前後の、日本政府諸官庁、朝鮮・台湾総督府などの刊行物・報告書類や満鉄関係の印刷物等が

老大な量に及んでおり、これらは占領軍によつて東亜研究所など戦時の施設機関所蔵のものを一括没収したものであるが、私にはこれらが将来はますます貴重な資料とならうと感ぜられた。

スタンフォード大学の Hoover Inst. は三十一代大統領 Herbert Hoover が、一九一八年五万ドルをス大学に提供し、E. D. Adams 教授が首となり、ヨーロッパに大戦の資料を蒐集したに始まる。一九四一年に現在のフーバー塔が建設されたが、この年太平洋戦争が勃発し、極東の資料蒐集が文庫の重要な分野の一となり、また平和を推進するための研究を目的にかゝげた文庫が、アメリカの戦勝を補助するための調査所となった。一九四五年十一月には文庫の東京事務所が設けられて、戦争に関する資料の採集に従った。中国共産党に関する資料蒐集と研究がその後、文庫の最も重要な目的の一となったことはいふまでもない。

同文庫の日本関係の資料の現状は、日本語の書籍四万冊、定期刊行物一四〇〇種、新聞三〇〇種余を所蔵し、四〇〇種の定期刊行物と二〇種の新聞が現在収受されつゝある。これ

らは主として、日本の近代化における政治・経済・社会的資料、大戦後の政党および労働運動に関する資料、朝鮮統治関係資料、軍国主義の発達に関する資料等であつて、中にはかつて機密に属した文献類も多く含まれていゝる。要するに、この文庫はアメリカにおける、日本や中国の現代史研究に独自の場を提供していると思われる。

最後に、一九六三年三月二十五日より三日間、フライデルフイアで開催されたアジア学会第十五回年会、同二六日より三日間、ワシントン・D・C. で開催されたアメリカ東洋学会第一七三回大会に出席して見し聞た日本関係の研究発表について所感を述べたいが、紙数の都合で省略する。

Rheinland のロー遺蹟

岡部 健彦

Baden と Frankfurt a. M. の北方に位置するいわゆる Limes の一丁の砦 Saarburg の遺跡・遺物についてスライド・フィルムを見て頂く。

Köln はこの北域に Germanen の一部族 Eburonen がいたが、53 v. Chr. に Caesar の有名な Gallia 遠征によつて殲滅された。その後ローはローに帰属したゲルマンの部族 Uier を Rhein 右岸から移住させ、こゝに彼等の Hauptzitz とし Oppidum Uburum が建設された。それは直角に交叉する街路をもち hellenistisch-römisch な都市を模範としてつゝる。Oppidum Uburum の傍には、またロー軍団 (Legio I u. XX) の冬の屯営陣地 Winterlager が設営されたが、紀元後三〇年代に Legio I は Bonna (今日の Bonn) へ移転した後解散し、Legio XX は Novesium (今日の Disseldorf 対岸の Neus) の艦隊泊地へ移動した。その当時、軍団司令官として Oppidum に駐在した Germanicus の娘として Agrippina がこの地で生れたことは Köln の歴史によつて重要な出発点となる。彼女は、のちにローで生長し、やがて 49 u. Chr. 皇帝 Claudius

の妃となり共同摂政となった。そこで彼女は五〇年に、彼女の生地 Oppidum Ubiornum を Colonia すなわち都市法の適用されるローマの都市に昇格させた。これが、ドイツにおける Colonia の最初のものである。以後 Oppidum Ubiornum は Colonia Claudia Ara Agrippinensium と称され、それは今日でもローマ時代の市の北門の Mittelbogen に CCAA の文字が刻まれて残されている。そして現在の Köln という市名がこの“Colonia” から由来していることはいまでもない。現在 Köln に残っている遺跡は Trier に比較すれば断片的な観をまぬがれないが、しかしローマ時代の Stadthauer の礎石は殆んど完全に認められ、中世以来の Köln の Stadtmittel とその主要街路は殆んどローマの Colonia の上に構成されていることがわかる。また今度の戦争で市が大破壊を蒙り、戦後の復興の際にローマの遺跡が大規模に発見され、重要な発掘と調査が行われた。その結果中世以来市生活の中心とされていた場所が、実は既にローマ時代の市生活の中心であったことがいよいよはっきりして来たことも興味深い。たとえば Rathaus の位

置は既にローマ時代の Praetorium であり、市の小高い丘に Karoliner 時代以来の伝統をもつ St. Maria im Kapitol があるが、そこはローマ時代に Pantheon の建てていた場所である。また有名な Dom の地下から戦後発見された遺物により、この位置にはローマ末期の市の支配者の Baptistrium があつたことが知られている。さらに市の守護聖女をまつる St. Ursula をはじめ St. Gereon, St. Severin 等の教会は、ローマ末期・初期キリスト教の時代に Basilika が建てられているが、それらはすべて異教時代以来のローマ墓地であつた。なお Köln には南西の Eifel の山から 77 km にわたつて水道がひかれていたが、その遺物はきわめて僅かしか残っていない。しかし Köln のローマ時代の遺物では、きわめて精巧なガラス器具が多量に製作されていたことが著しい特色である。墓碑や神殿の祭壇献納碑さらには邸宅の床として発掘された華麗な Dionysos-Mosaic 等々から、我々は、古代世界を統合し Pax Romana をほこつたローマの世界性が当時の辺境であつた属州 Germania にまでも実に豊かにもさこまれていたことに驚かざるを得ない。なお Köln のローマ遺跡や遺物の写真撮影は、原則的に禁ぜられているものが多く、東アジア美術館長の Prof. Dr. Speiser と同館員 Fr. Dr. Dittich 両氏の助力により、それらをフィルムにおさめることができた。こゝに両氏に厚く感謝する。(Xanten, Trier, Saarburg 等については略す)。

委員の交代

西洋史担当委員野田宣雄氏は、京都大学教養部講師に転任のため昭和三十八年八月三十一日辞任し、代つて西洋史学助手望田幸男氏が委員された。

学会消息

読史会

七月例会

七月一三日(土)午後一時より

於・京大薬友会館(以下同)

徳川初期の町人生活

松山 宏氏

九月例会

九月一四日(土)午後一時より

ハワイより帰りに

小葉田 淳氏

一〇月例会

一〇月二日(土)午後一時より

「たまきはる内の朝臣」考 岸 俊男氏

福沢諭吉 広田 昌希氏

中国中世史研究会

七月六日、於東山荘

竹林七賢について 長 兌子

九月二日、於名古屋大

「唐宋期に対する侯外廬氏の見解」 磯波 護

「谷川道雄氏の最近の研究について」 森 正夫

東洋史大学院会

七月二三日(金)於楽友会館

『東洋史研究』二一卷四号合評会

報告者：磯波護、佐竹靖彦、藤田敬一、

狭間直樹

一〇月二日(金)於東洋史研究室

侯外廬『中国思想通史』紹介

報告者：藤善真澄、吉川忠夫、佐竹靖彦

磯波護

一〇月一八日(金)於東洋史研究室

侯外廬『中国思想通史』

同 「中国古代社会史論」紹介

報告者：狭間直樹、藤田敬一、堀川哲男

西洋史読書会例会

於 京大西洋史研究室

九月一四日

『史林』四六卷二、三号合評会

九月二十一日

アラマン地方前封建期の荘園と共同体

九月二十八日

「哲学大系(4)歴史理論と歴史哲学」合評会

十月十二日

Barracough の ミューンバ 史批判

十月十九日

スベルタのレトラに関する一考察 前川貞次郎

十月十九日

Distraict と保守党 新村祐一郎

十月二十六日

書評 Davis, J. C., The Decline of the Venetian Nobility as a Ruling Class 1962. 村岡 健次

十月二十六日

ドイツ議会主義に関する若干の 永井 三明

十月二十六日

史料について 野田 宣雄

人文地理学会 第五十三回例会

九月二十一日 於 大阪市立大学文学部

歴史的都市の過去と現状

——土佐・中村市の場合——

フランス・アルプスにおける牧畜の変貌 山崎 俊郎

阪神都市圏について 石原 照敏

四六卷五号 藤野保「幕末・維新时期における小藩の構造とその動向」正誤表 村松 繁樹

4頁上段1行目

誤 貳拾石未満之^{正者}者者

誤 貳拾石未満之^{正者}者者

誤 「三十七士同盟」

正 「三十七士同盟」

28頁上段9-10行目

誤 「三十七士同盟」

正 「三十七士同盟」

定価二〇〇円

史 林 (第四六卷第六号)

一九六三年一〇月二五日印刷

一九六三年一月一日発行

発行所 史 学 研 究 会

理事長 中村印刷株式会社

印刷所 中村印刷株式会社